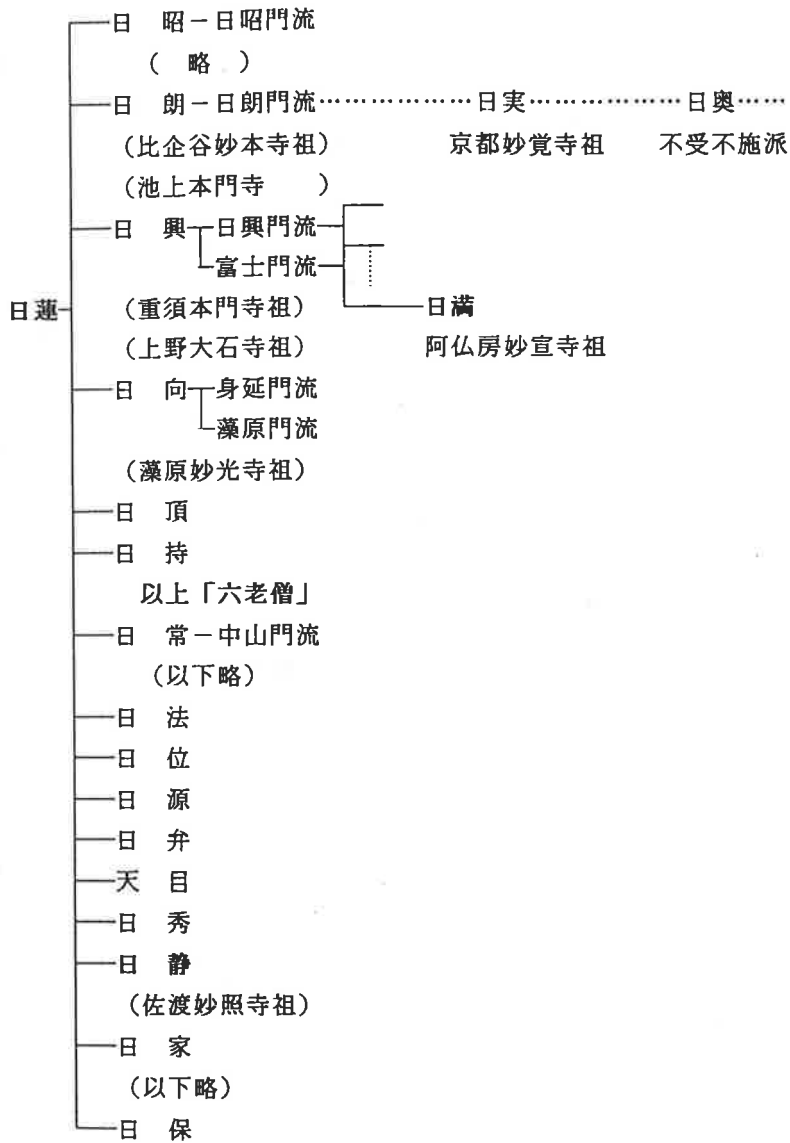


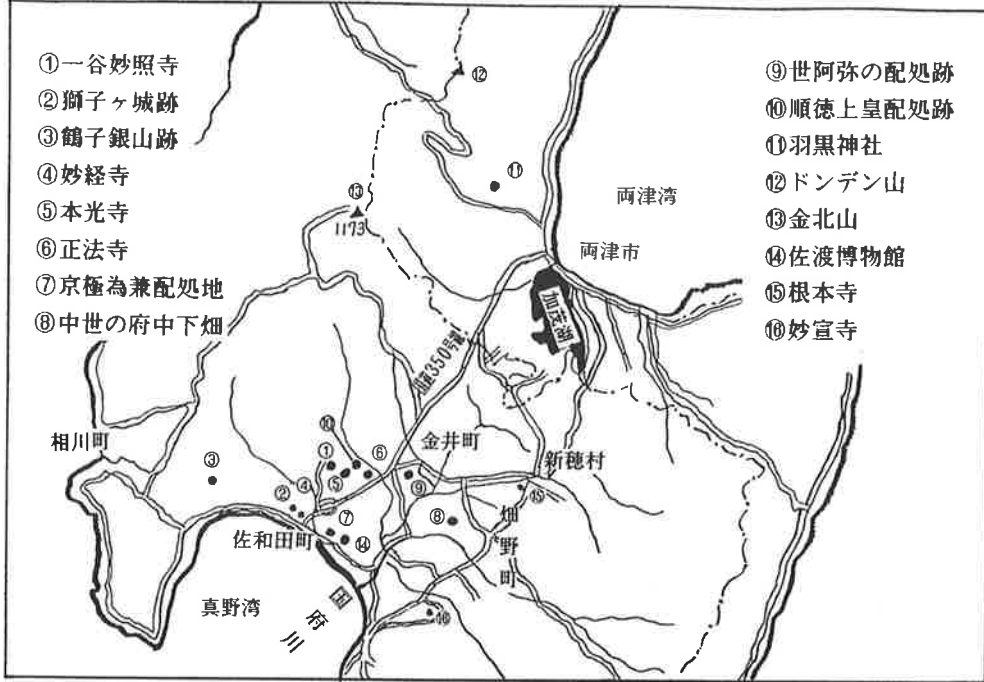
参 考 資 料

1. 日蓮宗諸門流系譜（一部分）
2. 史跡地図
3. 佐渡全図
4. 佐渡に現存する独立能舞台（写真含む）
5. 略歴
6. 講演リスト

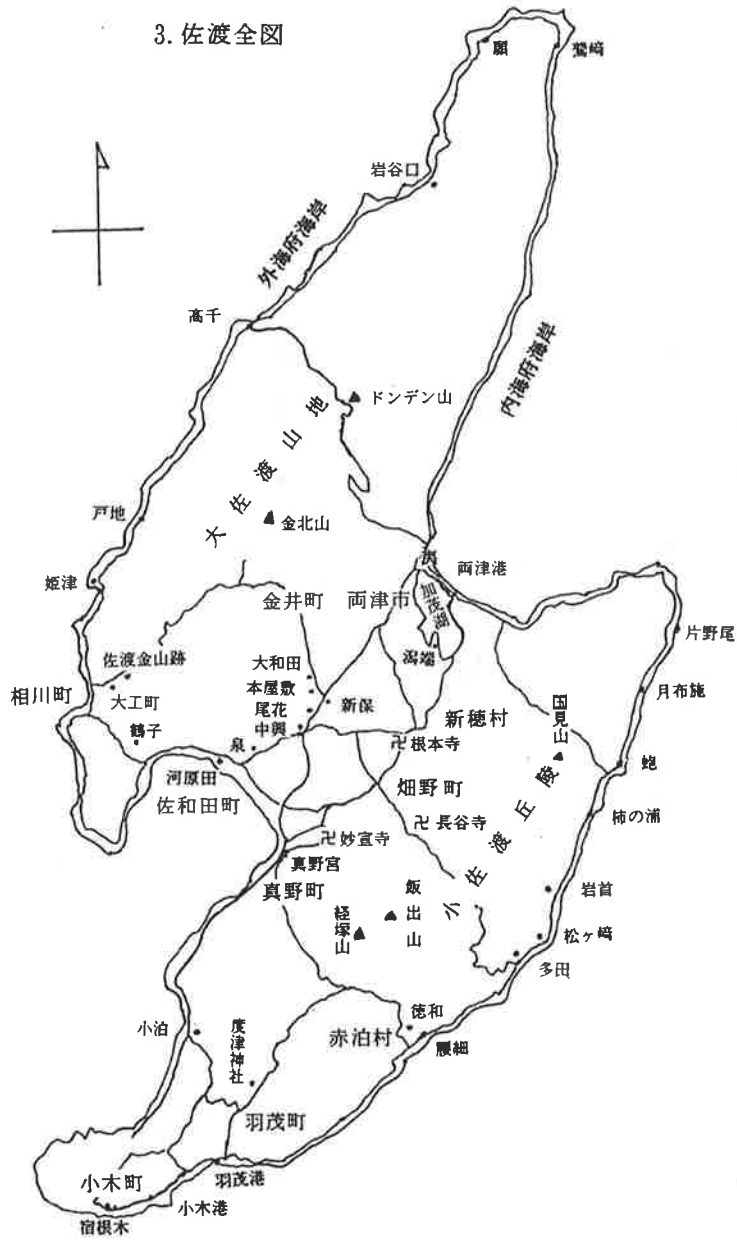
1. 日蓮宗諸門流系譜（一部分）



2. 史跡地図



3. 佐渡全図



4. 佐渡に現存する独立能舞台

舞 台 名	所在地	舞 台 名	所在地
1 本間家能舞台	両津市吾潟	18 諏訪神社能舞台	真野町豊田
2 伊豆神社 "	"	19 白山神社 "	" 大倉谷
3 諏訪神社 "	" 原黒	20 小布勢神社 "	" 西三川
4 住吉神社 "	" 住吉	21 気比神社 "	" 椿尾
5 熱串彦神社 "	" 長江	22 熊野神社 "	" 静平
6 諏訪神社 "	" 潟端	23 大山祇神社 "	" 金山
7 金峰神社 "	" 上横山	24 八幡若宮神社 "	" 四日町
8 八幡若宮神社 "	佐和田町下長木	25 白山神社 "	羽茂町小泊
9 二宮神社 "	" 二宮	26 気比神社 "	" 上村山
10 白山神社 "	" 西山田	27 草刈神社 "	" 羽茂本郷
11 羽黒神社 "	金井町安養寺	28 張弓神社 "	" 大橋
12 牛尾神社 "	新穂村潟上	29 白山神社 "	" 大崎
13 熊野神社 "	" 武井	30 諏訪神社 "	" 滝平
14 加茂神社 "	畑野町栗野江	31 白山神社 "	" "
15 玉林寺 "	" 畑野(平7郷)	32 白山神社 "	赤泊村上川茂
16 大膳神社 "	真野町竹田	33 徳和神社 "	" 徳和
17 総社神社 "	" 吉岡	34 春日神社 "	" 三川

(「佐渡の能舞台」新潟県教育委員会編：両津市郷土博物館提供)

(大石征勝氏「写真集 佐渡の能舞台」による)



玉林寺能舞台

畑野町畑野

5. 略歴

○本間六郎左衛門尉重連（？-1296）

大仏武蔵守宣時（北条氏）の配下で宣時の領地の守護代として佐渡に赴く。その管内に塚原があったが、本間重連の本館は本文にもあるとおり相模国依智。本間氏はもと海老名氏の一族で、依智郷に分れて本間となった。佐渡の本間の祖といわれる能忠は順徳院遷幸を機に佐渡に入国したともいわれる。この本間の子孫に重連がおり、依智と佐渡との間を事あるごとに往復していた。当時の文書によれば、文永九年（1272）「塚原問答」の折、日蓮は重連に対し、軍が起きるから鎌倉に帰ることを勧めたがそれに応じなかった。が、その日蓮の予言的中によって帰伏を誓ったといわれる。法号は蓮性日永。

○忍性良観（1217-1303）

鎌倉中期の僧。大和国磯城島生れ。西大寺観尊等から受戒。宝治元年（1247）鎮西に求めて三大律部を西大寺に納める。弘長元年（1261）鎌倉に入り光泉寺開山、北条長時の請いにより、極楽寺開山。弘安四年元寇により後宇多天皇の勅をうけて、調伏を祈る。永仁元年（1293）八幡で再び蒙古降伏を祈り、東大寺幹事となり、翌年四天王寺を管して悲田・敬田二院を建て、病貧者を救う。嘉元元年極楽寺に寂す。生涯、社会事業に尽くし医王如来と称される。

○北条宣時（1238-1323）

佐渡国の守護。文永八年（1271）九月日蓮の佐渡配流の時の守護で、預り役となった。武蔵守朝直の子。文永二年（1265）引付衆、同四年武蔵守、同十年辞任して武蔵前司と称す。建治三年から引付頭を兼ね、弘安十年執権貞時の連署、正応二年陸奥守。父朝直が良観の師範尊から受戒していることから、宣時その帰依者と考えられ佐渡国へ私の御教書を下して日蓮を迫害したといわれる。歌人でもあった。

○観世元清（世阿弥）（1363-1443）

室町前期の能役者・謡曲作者。観阿弥の子で能楽観世流の二代の太夫を継ぐ。足利義満在世の間、その寵遇を得て順調な活動を続けたが、四代義持更に六代義教に代ると次第に疎んぜられ、殊に義教から露骨な冷遇を受ける。永享六年の佐渡配流も、義教の命によるといわれる。その後失意の内に佐渡から京都に戻り妻の寿椿と共に女婿の金春禅竹のもとに身を寄せたが、最晩年の消息については不詳。

○塚原（地名）

日蓮が佐渡配流の当初、文永八年十一月から九年四月までの居住地。当時の状況について「種種御振舞御書」や「法蓮抄」に述懐している。この地で九年一月諸宗の僧と法論し、ことごとく論破した。（塚原問答）塚原山根本寺は天正十八年（1590）京都妙覚寺の日典により塚原の配所を正教寺として創したことに由来する。

○阿仏房（？-1279）

順徳院に供奉した北面の武士。院崩御の後、菩提を弔うため出家して念仏の徒となった。日蓮在島の時、念仏等の盛行するなかにあつて日蓮に帰依し、妻千日尼と共に強信をもって流人生活を庇護した。赦免後身延に隠棲したのちも三度身延に訪れるなどのほか折にふれて銭・米を送っている。誠実な信仰は終始変わらず、日得と号し、佐渡没。佐渡妙宣寺開祖。

○日興（1246-1333）

日蓮の弟子。六老僧の一人、白蓮阿闍梨と号す。甲州殿沢の生れ。初め天台宗で修学、のち日蓮に会って改宗、日興と名乗る。駿河国富士郡を中心に伝道。日蓮没後身延山久遠寺に住むが、後、去って富士に移り一派を創め富士大石寺を創建したことから、富士門流と呼ばれる。

○日朗（1245-1320）

筑後房・大國阿闍梨と号す。下総の生れ。若年にして日蓮の弟子となり、「日蓮の行くところ、常に日朗あり」と言われる程その身邊に従い、竜口法難に際しては日朗も囚われの身となった。文永十一年に赦免状を持って佐渡に渡り共に鎌倉に戻った。鎌倉（比企谷）を中心に活動し、妙本寺を拠点に教団の一翼を担う。六老僧の一人。比企谷に常住していたが、居住の本意は池上本門寺にあったと伝えられる。門弟も多く日蓮等の逸材が輩出し、後に日朗門流と称される。

○一谷入道（？-1278）

佐渡国石田郷一谷に居住していた名主の入道。外には阿弥陀堂を造り持つ熱心な念仏行者であったが、日蓮に心を寄せていたといわれる。日蓮は文永九年にこの地に移され同十一年赦免離島までの二年間入道の宿に謫居した。現在この地に妙法華山妙照寺が建てられている。

○日典（1528-92）

備前生れ。塚原根本寺八世、京都妙覚寺十八世等を歴任。一般には不受不施派開祖日興の師匠として知られる。日典はかたくなに祖書中心の折伏主義を唱え、子弟の育成に努めながら妙覚寺勢伸張に尽力。天正一

八年日蓮所縁の佐渡に実相寺（佐和田町市野沢）を開創した。

○中興入道

生没年不明。佐渡の中興（現金井町）に居住。夫妻とも熱心な檀越。父次郎入道はそれとなく日蓮を外護したといわれる。これを継いで日蓮に帰依し身延入山後も音信を寄せる。伝承によれば名を近藤次郎信重といい、本間重連の家臣で、最初は念仏者であったが日蓮の一谷移住によって帰依、妙経寺（中原）の始祖であるともいわれる。

○日静（1222-1301）

妙経寺開祖。一位阿闍梨と号す。日蓮直授の弟子。中興次郎入道と兄弟にあたる。真言宗の僧であったが、後、法華宗に帰依・給仕し、聖人により日静の名を受ける。殆ど佐渡に住み島民への布教に精進したといわれる。

○日衍（?-1637）

京都妙覚寺の首徒として声望高く、佐渡塚原根本寺十二世日是の屈請により十三世を継ぐ。中興の祖として称揚されたという。京都妙覚寺では根本寺の復興が日成、日興ら同寺の出身者の力であるとして末寺にしようとしたが、聖人の霊跡の故にこれを拒否したといわれる。

○文覚上人（1139-1203）

平安末期から鎌倉初期の僧。出家して神護寺の再興を志し、一一七三年後白河上皇に寄付を強訴、伊豆配流、同地で源頼朝と親交を結び、平家追討を促したと伝えられる。平家滅亡前後から頼朝、後白河上皇の庇護を受け、空海ゆかりの神護寺等を修復。頼朝没後は上皇に忌避され、佐渡次いで対馬に流罪、途上客死。なお、佐渡畑野町大久保にある真禪寺を開基したともいわれる。「佐渡志」には正治元年（1199）2月佐渡に流され、ここで亡くなったと記されているが異説が多い。戯曲「佐渡の文覚」（岡本綺堂）は孤島に苦悩する文覚を描き、ここで亡くなったことになっている。

○直江兼統（1560-1620）

織豊から江戸初期の武将。越後与板生れ。初め上杉謙信、死後景勝に仕え天正十年（1582）に直江兼統と名乗る。景勝の側近として「執政」などと呼ばれる。主君景勝が会津百二十万石の時、米沢城主として三十万石を知行。収集した古典を建立した禅林寺に集めて禅林文庫となし、また出版も行った。

○本文図版及び参考資料は、多くの方々のご協力のほか、主として下記の資料を参考としました。

- ・「日本歴史人物事典」（朝日新聞社、平6刊）「日本史広辞典」（山川出版社、平9刊）「日蓮宗事典」（日蓮宗議院（池上）、昭56刊）「日蓮辞典」（東京堂出版、昭54刊）「鎌倉・室町人名事典」（新人物往社、昭60刊）「新潟県人」（新人物往社、昭54刊）「越後佐渡文化財散歩」（学生社、昭48刊）「佐渡の能組」（日本文化研究所、昭62刊）「佐渡の能舞台」（新潟県教育委員会）「写真集佐渡の能舞台」（大正堂、昭52刊）「新潟県の歴史」（山川出版社、平10刊）

○味方但馬（1563-1623）

元和年間佐渡奉行として鎮日市左衛門、竹村九左衛門が任命され、大久保長安の金山経営に加えて、山師に必要な資金を貸し与える方法等をとって、寛永初期迄最も金山が繁栄。この時の多くの山師で最も有名なのが味方但馬。父村井善左衛門は池田輝政に仕えたが、晩年播州三方に隠退。但馬は初め福島正則に仕え、後、関ヶ原の戦功により五百石を貰う。慶長九年佐渡に渡り鉱山技術（湧水対策）の改良に貢献。日蓮宗に帰依、京都妙覚寺及び佐渡の殆どの日蓮宗伽藍修復に助力。佐渡の「春駒」の駒乗り姿は、但馬の鉱山杭巡視の時の姿と伝えられる。京都で没。墓は京都妙覚寺。

○山本修之助（1903-1993）

佐渡郡真野町生れ。宮内庁書陵部に陵墓守長（真野御陵）として二十年勤務。日本民俗学会評議員、新潟県文化財保護連盟常任理事、佐渡博物館理事等を歴任。著書「佐渡の百年」「佐渡の民謡」「相川音頭全集」「佐渡叢書」など多数。第12回文化人間賞受賞。平成5年没。

○京極為兼（1254-1332）

鎌倉末期の歌人、京極派の創始者。心の赴くままに自由な言葉で詠歌する革新的な作歌を主張。伏見天皇の歌道師範となる一方、持明院統政権を支持、政治的に活躍したため幕府に異図ありとざん言されて、永仁六年（1298）佐渡配流となり、五年後帰京。正和一年（1312）「玉葉和歌集」を単独撰集。同一五年西園寺実兼の忌諱に触れ、再び土佐配流。後年河内に移る。元弘二年没。

○吉田東伍（1864-1918）

北蒲原郡安田町生れ。明治、大正期の歴史地理学者。全くの独学で歴史学者として大成。読売新聞社に入社し、史論を展開、のち早大史学科教授。「日韓古史断」「徳川政教考」明治42年「大日本地名辞書」刊行完結。「利根川治水考」「倒叙日本史」を著すほか「世阿弥十六部集」校訂刊行。遺著「日本歴史地理之研究」。新津市正法寺に墓碑。

○橘 正隆（1892-1964）

本籍東京市麹町。中大法科卒。昭和11年佐渡に渡り、13年赤泊に住む。14年「附注佐渡名勝志」17年「佐渡兵制史話」刊行。その後吉井を経て22年に降水津に住む。「佐渡古典叢書」刊行に携わる。29年「水津村史編纂年志」、34年「河崎村史編纂年志」（上巻）を刊行。為政者側の資料より全島に涉って庶民資料を博搜し膨大な資料を残す。39年没。

6. 郷土史研究会講演リスト

- 第1回 「先駆ける群像」 H2.2.4 (中村一姓)
- 2回 「思い出すままに」 2.6.3 (中村一姓)
- 3回 「佐渡の木喰と地藏信仰」 2.10.7(中村一姓、以下同)
- 4回 「佐渡の名字—そこから考えられるもの」 3.7.7
- 5回 「金山は島に何を与えたか—佐渡文化論」 3.11.10
- 6回 「能登と佐渡の間」 4.6.21
- 7回 「明治の佐渡—内側を見た人、外で働いた人」 4.10.18
- 8回 「蘭学者 柴田収蔵」 5.2.21
- 9回 「大久保長安と佐渡」 5.11.14
- 10回 「流人 京極為兼の周辺」 6.5.22
- 11回 「良寛の実像」 6.11.27
- 12回 「回船商人 舟登源兵衛(岩谷口)の夢」 7.6.17
- 13回 「江戸時代の商業と流通」 7.12.10
- 14回 「佐渡の中世—日蓮上人配流とその周辺」 8.5.11
- 15回 「佐渡おけさと相川音頭」 8.11.10
- 16回 「世阿弥の頃の佐渡」 9.5.25
- 17回 「十八世紀・佐渡を動かした人々」 9.11.8
- 18回 「北一輝と佐渡の明治」 10.5.30